

若い共働きカップルや単身高齢者など多世代が共に暮らすコレクティブハウス。個室部分はふつうのマンションと変わらないが、共用のキッチンで食事づくりを交代で行い家事の効率化をはかるなど、入居者のニーズも補い合えるようなコミュニティティが育まれている。そんな6つ目のコレクティブハウスとして、NPOコレクティブハウジング社（※）は、現在、中野区で「コレクティブハウス沼袋」のコーディネートをしている。

5月のとある日曜日、新しく住人になる人たちと設計者らを交えたワーキングショップにおじやました。12月に完成予定と現実味を帯びてきた段階だけに、話し合いは真剣そのものだ。

「共用スペースのキッチンに置くコンビオーブンはどこのメーカーのものがいいのか？」

「土地が若干傾斜しているが、車椅子が必要な住人が入居した場合、大丈夫なのか？」などなど……設計から細かい設備に至るまで、議論は尽きない。このワーキングソーブの参加者の中心は事業主と賃貸借契約を結ぶ住人。設計前の段階で、借りる側が貸す側に対し希望を言えること自体が稀なことだ。

「賃貸住宅でありますながら、居住希望者が企画段階から参加し、家づくりとコミュニケーションに携わっていく過程は、コレクティブハウスならでは。家賃や改修内容でさえも、住民同士の話し合いで決まつていく。住人が協力しながら主体

的に、住まいや暮らしを作つてくことができるんです」と、狩野三枝さん（コレクティブハウジング社理事）は言う。

1歳と3歳半の子どもをもつ内海常葉さん一家は、多世代が共に集う暮らしをしたいと入居を決めた。

「マンション購入も考えましたが、マンションだと世代構成が似てきて、代の人間に囲まれて育つたので、子どもにもそういう環境を与えられたらと思って」。賃貸だと地域とつながりにくいところがあると思うんです。コレクティブハウスなら、地域コミュニティの拠点になり得るところにも魅力を感じました」と言うのは、内海礼美子さん。

現在、シングル世帯3組、夫婦世帯1組、子育てファミリー世帯2組の入居が決まっている。

シングルの川上英里さんも、いろいろな人とつながりたいと入居を考えた一人だ。

「仕事が忙しいこともあります、ふだんは職場の同僚と話す時間が多いため、同僚のほとんどは自分と同世代ばかり。ここ数日で近所の違う年代の人と話したのって、クリーニング屋さんだけかもしれない（笑）。それに、入居以前のプロセスからかかわることができるのが魅力。みんなで話し合い、理解し合っていく過程がとても重要だと感じています」

居住希望者は、プロジェクトを作り立ち上がる前からグループを作つて活動をはじめ、自分たちの望む

暮らしがと住まいについて話し合いを重ねてきた。勉強会やワークショットも頻繁に開かれているが、コレクティブな住まいの居住希望者に対する悩みでもある。

「コレクティブハウス沼袋」は、昭和42年に建てられ漬物工場として大切に使われていた建物をリノベーションする。鉄筋コンクリートがまだまだ珍しかった時代、将来にわたって大切にできるものを造りたいというオーナーの思いから造られた建物だという。

多くの賃貸住宅の場合、貸す側は「すぐ出て行ってしまうから」と考え、借りる側も「いざれ出て行くつもりだから」と妥協する。

これに対して、狩野さんは「コレクティブハウスは住人がその空間を心から気に入つて入居するので、大切に住むしコミュニティも育ち、住み手が住まいの価値を高めてくれる。長い目でみれば大家さんにとっても大きなメリットがあるはず」と言う。

「かつては庭付き一戸建てを持つことが多くの人の目標でした。しかし今は交通の便がいい都心を選ぶ若者が増え、無人化している一戸建も多くの人はや家を持つことがゴールとは限らない。賃貸という選択をしてしまう。コミュニティを育み、自由に満足して暮らしたい——そのためには何が必要なか、今後も考え、提案していくと思います」（飯島裕子）